

農林水産省食料産業局長賞

『最後の給食当番』

鹿児島県薩摩川内市立亀山小学校 五年三組 女子 鍋島 七花

それは突然だった。一年前、桜のつぼみが少し大きくなった頃、担任の先生が、私の親友の転校をみんなに告げた。おどろきで声も出なかった。

そういえば、最近、親友はせきが止まらず、学校も休みがちになっていた。その親友とは、二年生の時から同じクラスだった。そして、金管バンドでもともに練習を重ね、何度も一緒に大会にも出場してきた。嬉しい時もつらい時もともに同じ時間をすごしてきた。

あと何日一緒にいられるか、カレンダーを見ながら指を折って数えてみた。すると、あと十五日だった。しかし、親友は何日、学校に登校できるか分からない。計算してみると、最後の週は、給食当番が一緒だった。

それから、親友は、学校に來たり休んだりをくり返していた。心の中で、「最後の週は來てね。」という気持ちでいっぱいだった。登校できた時には、今まで以上に話したり、バカなことをしたりして時を過ごした。しかし、親友はせきが止まらず、会話にもならない時もあった。親友の体の中で何が起きているのか、私には知ることができなかった。

いよいよ、三月の最後の週になった。親友は何か登校してきた。「やったー。これで、一緒に給食当番ができる。」二人で大きな食缶を運び、みんなの分をつぎ分ける。親友が、「重くない？大丈夫？」

と聞いてきた。私は、

「咲嬉ちゃんと一緒だから大丈夫。」

と答えると、口元はマスクで見えなかったが、目が笑っていた。最後の給食は、パンとスパゲッティだった。二人でつぎ分けて、日直が、食前のあいさつをして、みんな食べ始めた。親友を見ると、おいしそうにスパゲッティを食べていた。次の瞬間、親友はおかわりをしに行つたのを見て、せきは出ても、食欲はあるんだったらよかったなと思った。食器をかたづけると、タイミンが一緒にになり、

「おいしかったね。最終の給食。」

と親友から声をかけられた。お盆を洗いながら、どうでもいい話でもり上がった。「これが最後、これが最後、これが最後」と何度も、心の中でくり返し言っていた。

「ごちそうさまでした。」

とみんなで言つて、軽くなつた食缶を二人で運んでいると、今度は私から、

「今日の給食で最後なんだよね。」

と言つと、

「また、いつでも、一緒に食事はできるよ。」

と、親友は返してきた。その言葉が心にささった。親友はそつと手をにぎつてくれた。その手は温かくて、私よりずっと大きかった。思わず、私は、その手をギュツとした。

いよいよ、修了式の日がやってきた。私にとって、思い出に残る給食は親友と一緒にした給食当番だ。